

円満想続の3K「感謝・絆・供養」

月刊ニュースレター

想 続

Vol. 23 (2012年8月号)

発行：一般社団法人 日本想続協会

〒107-0052 東京都港区赤坂 4-1-1 SHIMA 赤坂ビル 5F

TEL 03-6454-1567 FAX 020-4664-9664

E-mail info@n-sk.org (担当：内田)

☆定期購読（無料）のお申込は上記までどうぞ。

心に太陽を

想続塾塾長の内田麻由子です。広島と長崎に原爆が投下されてから67年目の夏を迎えました。核兵器と戦争のない平和な世界が来ることを心より祈っています。

子どものいじめが問題になっていますね。「国家の品格」の著者である藤原正彦氏は、子ども向けの著書「心に太陽を 唇に歌を」のあとがきで次のように述べています。

☆ ～ ☆ ～ ☆

私の子供の頃もいじめはありました。恐らく人類が発生した時からいじめはあったし、これからも永遠にあるものと思います。ただし私の子供の頃まで、いじめによる自殺などというものはありませんでした。生命の尊さを皆がわきまえていたからではありません。戦前、生命などは吹けば飛ぶようなものでしたが、いじめで自殺する子供はいませんでした。

いじめがあっても自殺に追いこむまでには発展しなかったのです。卑怯を憎む心があったからです。大勢で一人をいじめたり、六年生が一年生を殴ったり、男の子が女の子に手を上げる、などということはたとえあっても怒りにかられたその場かぎりのものでした。ねちねち続ける者に対しては必ず「もうそれ位でいいじゃないか」の声が上がったからです。

それに加えて、弱い者や貧しい者に対する涙もありました。日本は昔からずっと貧しい国でした。山が多いため田畑は狭く、そのうえ台風、地震、洪水、日照り、冷害などの自然災害がしばしば各地を襲ったからです。貧しいため生まれてきた弟や妹が医者にかかれずあつという間に死んだり、学校に

行きたくても農作業を手伝わなくてはならなかったり、という光景はどこでも見られました。

小さな島国の日本では、もっと暮らしやすい土地に移住しようというわけにはいきません。何千年もの間、皆で助け合い、励まし合って生きるしか他になかったのです。ここから弱い者や貧しい者への涙というものがもっとも大切なものとなってきました。

私の子供の頃まで、弱い者や貧しい者への涙に欠けていたり卑怯に走るような人間は、生きる資格すらないと思われていました。このような考えは世界に誇れる日本の心でした。これが今、外国はもちろん、日本でも失われつつあります。君達の祖父母や親が取り戻せなかったその心を君達が取り戻すのです。そして殺伐とした日本をうるおいのある日本に変え、またその心を世界に伝え、うるおいのある世界に変えるのです。それが勇気ある君達の役目ではないかと思います。 《藤原正彦》

☆ ～ ☆ ～ ☆

日本人の「卑怯を憎む心」と「弱い者や貧しい者への涙」は、ほんとうに失われてしまったのでしょうか。私たち一人ひとりの心の奥深くに本来備わっている仏心を、日々の生活のなかで子や孫に伝え遺していくことも大切な「想続」です。いじめという小さな悪の芽を摘むことが、悲惨な戦争を繰り返さないことへの第一歩であるように思います。

☆ ～ ☆ ～ ☆

心に太陽を持って 嵐が吹こうと 吹雪が来ようと

天には黒雲 地には争いが絶えなかりと いつも心に太陽を持って

唇に歌を持って 軽くほがらかに 自分のつとめ 自分のくらしに

よしや苦勞が絶えなかりと いつも唇に歌を持って

苦しんでいる人 悩んでいる人には こうはげましてやろう

「勇気を失うな 唇に歌を持って 心に太陽を持って」 《フライシュレン》